

ウェルウォーク通信

～ウェルウォーク活用の取り組み紹介～

日頃はウェルウォークをご活用いただきまして誠にありがとうございます。第19回目の今回は、イムス札幌内科リハビリテーション病院様（北海道）の取り組みをご紹介します。ロボット脚を使用した練習だけでなく、トレッドミルとしても積極的に活用いただいている施設です。

病院概要：イムス札幌内科リハビリテーション病院

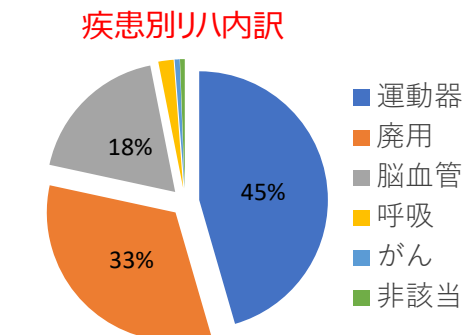
- ・回復期リハビリテーション病棟 115床
- ・一般病棟（障がい者施設など） 35床
- ・外来リハビリ、訪問リハビリ、通所リハビリも実施
- ・スタッフ数 PT53名、OT40名、ST8名

当院の取り組み内容

PTスタッフ全員でウェルウォークを安全かつ積極的に使用

- 1) PTスタッフ全員に定期的な研修を実施
→定期的にウェルウォーク研修を実施し、担当者がウェルウォークを操作できない事が無いように、また、担当者間で実施内容に差が出ないようにしています。また、新人研修でもウェルウォーク研修を開始しました。
- 2) 月2回のウェルウォーク会議で積極的な使用の促進
→各病棟に配置したウェルウォーク係が、各病棟の使用状況の共有および新規患者の選定を実施しています。脳卒中患者以外にも、積極的にトレッドミル練習として用いるようにしています。

平均使用人数：17.8人/月（内、トレッドミル練習のみ：14.5人/月）
3.6人/日（2.0～5.9人/日）



トレッドミル練習の幅広い活用

対象者：リハビリ実施中のすべての方
（入院・外来・通所リハ利用者など）
主な疾患：脳卒中、運動器、廃用、脳性麻痺など

【活用例】

日常生活上で、運動機会や運動量の確保が難しいと言われる、脳性麻痺児・者の方にも使用しています。

脳性麻痺児・者の方は、腰背部筋を過剰に使用して練習する場面が多くみられます。

視覚FBや免荷機能を使用する事で、体幹・股関節の伸展活動を補助する事ができ、腰背部筋の過剰努力を軽減しつつ、歩行練習をすることが可能になりました。



オンライン相談の活用

当院はこれまで、脳血管患者の入院割合がそこまで多くなかったため、ロボット脚適用患者への練習の経験値が溜まりにくい状況でした。そこで「適切な使用ができていないかの確認」と、「他院の意見が聞ける」という貴重な機会として、WEB臨床支援サービスを活用しました。

特にiPadを使用したオンラインでの臨床支援は、その場で患者様に効果的にウェルウォークを用いた練習を提供できるため、当院スタッフにも非常に良い刺激となっています。また、ディスカッションを通じ、当院のパラメータ設定の癖がわかったのも、有意義でした。

<担当PT 工藤友治先生のコメント>

ロボット脚での使用のみにこだわらず、視覚フィードバック+トレッドミルとしての活用も非常に高い効果を感じております。歩行練習時に足元をみてしまう患者様には、足元フィードバックを拜用することで頭頸部を挙上させることで正中を向くよう促せるため、とても重宝しています。疾患や病期を限定せず、様々な方への歩行練習にウェルウォークを活用しています。